

研究通信

No. 29

1950年9月刊
村落社会研究会
事務局
豊橋市町畠町
愛知大学
社会学研究室内

第六回年次大会

- 期日……十月七日・八日（六日夕刻参集九日朝解散）
- 場所……宮城県玉造郡鳴子町鳴子温泉「農民の家」
- 共同課題……「村落共同体」
- プログラム……十頁に掲載

会員各位が待望される本年度大会はいよいよ来月七、八両日、宮城県鳴子温泉で開催されることになりました。回を重ねること六回目、ようやく形式化される兆候が見えはじめた秋、宿泊大会を企画したことはまことに意義ぶかいものがあります。

今回の企画は、前号でのべましたように、会員各位の御意見を基礎に、拡大委員会の慎重な検討を経て決定されたものですが、プログラムの編成において、同委員会記事にありますように、報告者を公募しながら、希望者多数のため、自由課題のすべてと共同課題についてさえ幾人かの方に御遠慮頂かなければならなくななりましたことは、時間の制約とはいえ深くおわび申上げたいと存じます。また期日や経費の関係で御出席が困難な方も決してすくなくないところ存じます。しかしながら、私達は発足当時にみられたある心あたたまる同志的結合を再現し、本研究会の質的発展を期するため、すべての障害を乗り越えて、本大会を成功に導かなければなりません。全会員の御支持を心からお願いするとともに、どうか多數の会員が参加され、熱烈に御發言されることを期待いたします。

大会会場の御案内

「ひょうたんから弱が出る」という古いたとえを地で行く結果になり、大会会場は宮城県鳴子温泉の「農民の家」でひらかれたことになりました。全く会員諸兄の御熱意によるところと、勤進元の役を相勤める仙台連一同、深く感銘すると同時に、充分御満足のゆくような取扱ひができるかどうか、恐縮の念を禁じえません。しかし、何とかできるだけ努力はいたし、諸兄の御期待に添うようになしたたく存じます。取りあえず通信誌上を借りて、ごく簡略な御案内だけをさせて頂きます。

- 一、会場地（鳴子温泉）略図（次頁参照）
- 二、交通

東北本線（約二時間十分）

◎ 東京 → 仙台 → 小牛田 → 鳴子（下車）

△仙台駅前より直通バス（約二時間半）
（東北本線（急行六時四半）、陸羽東線（約二時間二十分）
常磐線（急行六時間））

外に

（東北本線（急行六時四半）、陸羽東線（約二時間十分）
常磐線（急行六時間））

鳴子駅より徒歩約七分。

（駅前を右折し、構道を家並のはずれるところまでゆく）

四、汽車連絡

（上野）九・五〇一（仙台）一五・四七一（小牛田）一六・

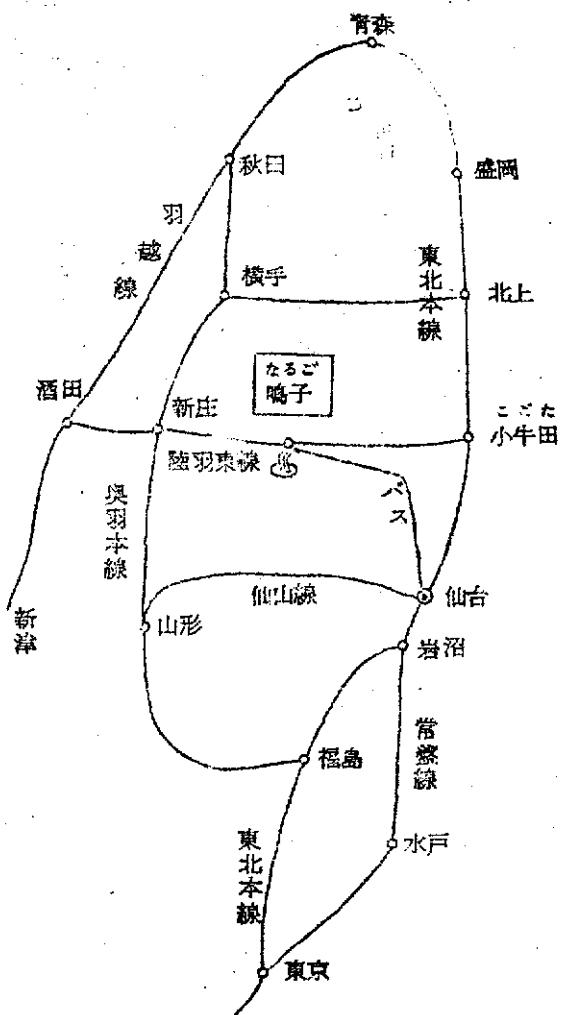
（仙台よりバス）

一七・

四四（のりかえ）

一一〇一（鳴子）一八・三三

会場地図(鳴子温泉)路線



△鳴子峡と中山平(この方は、大会中に散歩をかねてもできましょう)
(竹内利美)

◎ 会員各位へお願ひ

一、御出席の有無、宿泊日数など同封の英書で御連絡下さい。御連絡は朝日が迫って居りますので至急お願いします。なお整理の都合上御欠席の方もその旨御連絡をお願いします。

二、参加者は到着後直ちに受付で

1. 大会参加費(含懇親会費) 300円

2. 宿泊費(三泊) 1,200円

3. 昭和三三年度会費(既納者を除く) 300円

計 1,800円

をお支払い下さい。

三、同封のプログラム・レデメは残部がほとんどありませんのでからなず御持参下さい。

四、年報も当日発刊される予定です。当日御欠席の方には別に御連絡する予定。

五、見学が実施される時は受付に申込んで下さい。

六、なお、有志の方々のために、鳴子辺の見学を予定してもよいと思います(大会終了翌日)

(事務局)

- 全(あん)急行
(上野) 11時・○〇一(仙台) 六・一〇
(仙台よりバス)
- 一(小牛田) 七・一三(ののかえ)
七・一四一(鳴子) 八・三六

宮城県農業共済組合の経営。一泊(1食付) 400円。

安直と氣楽なのがとりえですが、豪華な温泉宿宿分の方は御幸構下さい。

六、なお、有志の方々のために、鳴子辺の見学を予定してもよいと思います(大会終了翌日)

* * *

- 東北線仙台止り(青葉) 急行
(上野) 九・〇〇一(仙台) 一五・四〇
(みちのく又は仙台よりバス)
- △外に仙台下車、バス利用の方途あり。
- △東北大學川渡農場(旧軍馬補充部)
泉あり)
- △鳴子ダムと用水(ダム下流)
- 五、会場「農民の家」

村落共同体——歴史学

廿一
校志

村落共同体の歴史的研究、または歴史学における村落共同体研究については、先に本会年報にも書いたが、前のときとくらべて、あまり多くなっているようでもない。共同体は一時かなりとりあげられた。もっとも不足していた中世についても、戦前の清水三男の日本中世の村落むたりからひきついで、名と莊園の構造の研究はいちじるしく進んだが、村落共同体というみかたの面ではたちあくれている。永原慶一が名主相互の間に共同体を想定しているくらいで、中世に村落や共同体を考えることはないと、常識みたいなものもできている。もっとも、できるだけ成果を盛りうとした古島敏雄・日本農業史が各時代に村落・家族の章を設けているなど、村落共同体の重要性はみとめられてはいるようだが、そこに盛られている中世の村落についての叙述が、きわめてマイマイであることは、一般的な研究のたちあくの反映であろう。これに対して、近世の村落・村落共同体については、歴史学者にとっては、もう既に話のつい大前提として取扱われていて、それは、例えば共同体の問題にすることはもうすんで地主制・寄生地制が当面の問題であるという様に著書や論文の上では見受けられる。そしてその中にはかならず村落共同体の問題がからまされているのは当然のことであるが、その場合、村落共同体はもう分ったものとしてあつ

かわれてゐる。どのようにわかつたものかと
いうと、郷村制度といふことである。村とい
う制度があり、村規約があるといふそのこと
で、これが共同体と定めてゐる。やくわし
く、農民が「ほぼ完全な自立再生産者であ
り、だれと共同關係をとりむすればなくとも生
活できる自立者である」が實際は「自立性は
まだまだ弱く」「彼の隣人達と共に關係をと
りむすぶ必要が」あって、このむすばれた隣
人集団（近世的）を村民共同体と名附けてお
こう」という大石慎三郎・封建的土地所有の
解体過程（一二五頁）の規定もあるが、この
程度の規定では具体的とはいえないだろう。
同じようなことは、古島敏雄編・地主制の研
究の中の諸論文の中にある。地主制と共同
體の関連でみるのは当然であるが、共同体が
郷村制で現わされるとか、村規約の存在によ
つてみられるとか、自立性の弱い農家が隣人
集団をつくるのだととか、その程度でわかつて
しまったというのはどうか。そういうわかり
かたが、しかし、多いのである。

近世についてそうなのであり、中世がまだ
わからぬのも当然かも知れない。古代にいた
つてはなおさらということになろう。しかも
みな「わかつてゐる」のである。そのわかり
かたを、ごとばの上にとどめないで、檢討し
てゆくことが、もう癖がねねばなるまい。

私の聞きたい諸点

喜多野清

「村落共同体」を共同課題にしての泊り込みの大
会だから、村研 자체の発展充実のため大きい
意義を持つだろうことはもちろん、私も私な
りに色々な期待や楽しみを抱いてゐる。課題
そのものについて色々啓発を受けるだろうこ
とはまづ第一であるが、そのほかにも、村落
を研究する上の様々な問題や方法について教
示を受けることだらう。今度は時間の余裕が
あるから、ゆっくり話も聞けるし、自然解ら
ないことは説明を求めることも出来るだらう。
それに研究上の体験を膝を交へて語り合へる
のは少なからぬ楽しみだらうと、今から想像
してゐる。それはともかく、本年大会の看板
である共同課題については、やはり私は社会
学の考へ方に立つて聞きもし解釈もしてゆき
たいと考へてゐる。それは別段それにこだわ
るとか、それを固執するといふ意味ではない。
しかし社会学的立場——もちろん私のばかり
それも甚だ怪しいものだが——に一応立つて
村落社会の勉強をやってきたのだから、共同
体論についても、この立場がどこまで理論構
成的な意味で役に立つかを、自分の問題とし
て考えてみたい、といふのが私なりの期待な
のである。たゞ今度の報告には、「村落共同
体」概念の理論的検討を直接取扱ったものは
なく、対象村落についての調査に基づいた具
体的な村落生活研究の報告が主であるやうに

聞いてゐる。しかし共同課題を踏まへての報告であるから、そこには共同体理論が内包されてゐると思ふし、むしろそれを前提とした具体的な村落生活の分析が示されるだらう。それぞれの立場からの共同体理論が、むしろ、その立場からの共同体理論が、むしろそれがもとで整理して豊富な生活内容を踏まへて実際的に現知されることと思ふのである。さうなると参加者の各自の立場からの解釈と対比させる具体的な場面となるだらうし、私などもそこれから色々な益を享けることにもなるだらうと思ふのである。さういふ理論的立場の違いがあつてよいのだし、むしろそれがもとで整理された形ではつきり提示されることが望ましいと思ふ。だから逆説的な言ひ方かも知れないが、私などはもつと私なりの立場を一層理論的に明確にするために今年の大会報告を持ちたいと思ってゐる。それは自分なりの理論的立場が可能であるかどうかを確かめたいので、繰り返して言ふが、それに拘泥するつもりはない。

そこで私はすみぶん懇意の深い注文を持つてゐる。私は出来るだけ対象村落の生活構造の全体が理解されるやうに話して頂くことを論者にお願ひするのである。論題によつてはさうすることの難しさはあるだらうが、しかしその問題が全体構造とどういふ連関において論ぜられてゐるのかを示して下さることは出来ようと思ふ。論者は村落社会生活のどういふ構造を共同体と考へておられるのかそれを教示して下さることが一層ありがたいのである。社会学ではどう解釈するかなどと大言出来る私ではないが、やはり共同体を一

個の社会集団として、どういふ構造的性格をもつたものであるかといふ観点から考へてゆきたいので、こんな注文を軽くのでもある。だから村落生活の全体構造を理解したいのである。だからとへば経済生活はもちろんその重要な基礎部分をなしてゐるが、それを部分として生活の全体がどのやうに構成されているのを共同で、おそらく色々な意見が出ており、あるひはさう明確化されないまゝにこの概念を使ってゐたりするのではあるまいか。また共同体は社会集団としてはそれ自体の生活構造の自主性を持つてゐると考へるのだが、その自主性を誰かとするために墨々複雑な統合の状況が探求された。その結果統合がさらにも統合性を持つてゐれば、一層共同体としての自主性があるものと理論的には考へてよいが、現実にはこの機能算積・統合は幾々な結構を呈してゐる——あるひは呈するものとして報告されてゐる。そこでこの場合にも色々と問題がある。それをこゝでは簡単にさへ置ける余裕はないが、状況自体が複雑である上に、問題理解について研究者側にも問題があると思ふ。その辺の整理がだからやはり重要な仕事だと思ふのである。それは方法論的な整理である。この点では外國の共同体研究から学ぶ余地はあるやうに思ふ。ところが共同体についてはさらに規範的統合の問題が重要である。これは人々を共同体の意識において拘束する。この規範的統合の内容は村落の共同体としての性格を規定する。それは村の支配構造の問題でもある。支配は村落において幾重にも重

なつてゐるだらう。その相互連関の中で村落がどういふ支配構造を持つ共同体をなしてゐるかといふことは、重要な意義を持つ研究問題で共同体が規範的統合を失つてゐないか、それは如何なる内容を持つてゐるかなどの階層が強く関連してゐると考へるのである。かうした問題にふれて啓蒙を受けることを私は強く希望してゐる。たゞへんお古い話であるかも知れない。だから人に説かうといふのではなく、さういふ立場で諸説を聞かうと思ふのである。中野君から寄稿を求められた際も、私の聞きたい点を書くことで諒解して貰つたわけである。基しに走り書きで、誤解を生む惧れもあるが、もともと右のやうな性質の文章として、切に御寛恕を乞ひたい。そしてもし出れば、かうした諸点についてはもちろん、その他色々お話を伺ひたい。

(九月十三日)

＊

＊

会員の声

おおむねアンケートをとりましたもののうち
村研今後の全体としてのあり方　①今年度
へ人に要望　を掲載しました（順不同）

(一) 全体としてのあり方

中野卓

連絡の必ずしもとりやすい場所ではない事務局が、それを克服しながら事務局活動の成果を上げて下さっている事を感謝します。

研究通信への投稿を更に活潑にする事が、会員として我々の研究会を、我々のものとするための重要な方法の一つであること、大会・年報・村研通信の三者を会員・事務局・委員会の三者で一層もりあげてゆこう。

吉沢四郎
原稿を提出しないで、甚だ勝手な希望です
が、「会報」をもと増頁して、論文なども
掲載して、あつと読みこたえのあるものにし
たいものです。財政の問題も根本にあると思
いますが、対策を樹てていただけないでしょ
うか。

卷一百一十五

協同研究ないし研究上の協力が各地域において促進され、それが研究通信の記事にも、また村研通信が、さような気運を鼓舞するような役割を演することを望む。

前々から、大いに期待して居るが、それ以上注文を出す程に接触できないのが残念。にも拘らず、いろいろ連絡をいただき、それに對する返事もいたさず過ぎてきた失礼をおわび致します。

いて、村研の年次大会が行われても、その「独立性」に影響あるものとは思われないようです。年度のテーマを「共同課題」で行われる事も結構ですが、それと並行して、各箇所の研究報告が行われる事もよくあります。

吉井藤重郎
別に異議なく、運営に当つて下さる諸賢、
感謝しております。

齊藤兵市

「共通体とは何か」わかったようで、わからぬ、この本質論について十分討論する事がのぞました。

「社会学的観点」をもつと明白に確立した
山田敬道
い。個別的な実態調査の研究もさりながら、
もつと巨視的立場に立つ、基礎的方法論を主
要課題としたい。

高倉又二

最近一向に御無沙汰がしてしまって、間に
申訳なく存しております。然し、静かに反省

いたし、端的に申上げた場合、御無沙汰の根

概には上り本質的なものかわった様に思ひます。勿論、村研の在り方についてといった

事ではなく、この数年間にはつきり露呈され
て来た農村農業の現実と、それを構想分析す
る農村農業理論とのギャップ、そこから醸成
される混迷、焦燥、誤謬、こうしたものが、
やはり、個人的にも御無沙汰といふ姿になつ

たと反対もいたしております。やつと至しい學習の姿勢に向う時機が、こうした空しさ、苦しさの中から、芽生えつつあるのではないかと存じます。そうした意味で、貴重などの歴史研究会であるべきは勿論であるが、そのためにも、ヨーロッパや、アメリカにおける研究がもっとと参照されてよいのではないか。
将来、いろいろの方面的研究をやってくる人々にも、もっとと積極的に参加してもらおう。場合によっては、部会でも設けてはいか。

を祈念します。

山 崇 周 幸

村落社会研究会が、まことに日本村落社会研究会であるべきは勿論であるが、そのためにも、ヨーロッパや、アメリカにおける研究がもっとと参照されてよいのではないか。
将来的、いろいろの方面的研究をやってくる人々にも、もっとと積極的に参加してもらおう。場合によっては、部会でも設けてはいか。

森 村 聰

(一) 社会学、経済学、政治学など諸科学のよ
り一層の交流を。

(二) 調査と理論の結合。

(三) 歴史的体制的視点の強化。

中 村 正 夫

取立てて希望意見はありません。むしろ、小生としてはもっと積極的に参加したいと思つてゐるのですが、九州からの参加は歓迎その他の点で、制約をうけますので残念でなりません。

松 原 治 郡

村研も少し中だるみの感じがしますが、本年の大会を期して、活性化させる必要はあるませんか？ 又外部に対する宣伝もある程度すべきだと思います。

小 川 篤

大へん結構だと思います。村落研究の問題点を学びたいと思つてきます。

山 本 登

全般として、やゝ formalize してきた気持。 membership の交代などあれば、今むをえなに事とも尋ねられるが。共同の調査という程のものでなく、各会員が機会に応じて、これだけは調査する、といった共通の項目位は作成できないものか。もつともあまりくわしくなると困難となるが。

松 村 安 一

創立当初に比し、全体の関心が低くなつてゐるのはないかといふ要因をもつていています。これを当初のように盛上る方向に持つて行く事を考えねばならないでしょう。

蓮 見 音 彦

社会学、経済学その他社会科学との交流としての役割を、年々より一層発揮するようになり、大いに有意義だと思しますが、もっと多くの方の参加が期待されてよいのではないでしょうか。経済学、経済史学、農業経済学などにも、まだ会員となっていただきたい方が多いですし、その他、法社会学や政治学、法務学などにもあるよう思いますが、村落の問題は今日、総合的な視野が一層必要になつてきていると感りますので。

安 孫 子 静

折角、各専門分野の方が集まり、村落の問題をやつてるので、それぞれの専門の立場を積極的に主張して、その上で総合する方向をとられる事を望みます。実際の大会の共通テーマの報告者をみると、そのバランスがう

きくとれられないよりも思われます。どん

な会でもそうですが、何か共通の討論の場がないので、その点村研は一番テーマ的には

適いので、その点村研は一番テーマ的には

宿泊設備、調査対象地等で問題はあると思いますが、一つの村落を共同調査して（グループ毎に）その結果を討論というようにしたら、考え方について種々の見解が出されるし、理解の仕方にづいても相違があろうし、興味

ある大会になると思ひます。

森岡清美

討論に於て、事実の相互提供も大切だが、そうした事実をつかみ整理する方法論の相互検討が又大切であるから、司会される先生に於て、この点御考慮いただきたい。

桜井徳太郎

テーマの選び方も、共同体内の思想、民間信仰、文化等の上部構造の基層面からの分析研究がたち離れていると考へる故、これに沿うて、もつと巾を広くして頂きたい。焦点はなるべくしづらなければならぬ。しばらくの間成功する。唯、それを広い分野から眺めてゆくという方向が望ましい。

内山政照

有賀、喜多野両大臣所に、今度はじっくり三時間でも四時間でも自説を展開して頂き、それに向って、メンバーが総討議を試みるといふのは、如何。

山岡栄市

(一)問題提起を明確にして頂く事。社会学者の側からのみでなく、経済学、経済史学等隣接の立場からも。(二)討議をなるべく気軽に、ゆっくりと時間をかけてやるようにしたい。此の意味で一泊二日の会期は必要です。

シンボジウム及び討論会形式のものの充分な時間的余裕を与える事。

有賀喜左衛門

共同宿泊の大会を我々は希望していた。鳴子に行きたいといふ事もその意味で、日常的に接觸できないから、一日でもゆっくり膝を

つき合せて話をしたい。そういう機会から将来の共同の討究を盛んにするきっかけを作りたい。鳴子で二泊か三泊位するようにならに願いしたい。

鈴木廣

十一月初旬、鳴子で聞くよう希望する。

期日は日本社会学会とは別だ。

大山彦一

今年度も大会期日は、日本社会学会大会にひきつづいて定められる事が望ましい。其開催場所は勿論日本社会学会の場所とは別に行われると思いますが、其場所はどこであっても差支えありません。

吉井藤重郎

出来る限り、東京で行われる日本社会学会の前後に、先日御連絡下さった鳴子ででも聞いて下さるならば、長距離旅行者には大いに便宜に感ぜられます。

北川隆吉

原則としては、研究通報函26の福武提案に賛成ですが、会員の方々の色々の都合もありますから、場所は変更になつてもいいと思ひます。年一回の大会ですから、できるだけ沢山の方が集つて討論ができるべきです。

喜多野清一

発表何分、質疑何分、という形式をやめ、発表後、部会を編成して十分討議するような形式がのぞましい。

共通課題のもとに統一的な討論を。

森村勝

とにかく何とか参加したいと思案中です。

原宏

今年度の開催期日は日本社会学会に引続いて行う方が、出席し易いのでそう願いたい。

木下彰

のでもなし無理に恰好をつける事も危険でしょう。

日本社会学会の前後にやつてもらえると出席できるのですが。

内藤莞爾

席できるのです。

高倉又二

発表は出来る限り、勿論限界はあると思いまが、全国的展望に結び得、理論化への志向において集約された形態なり、内容なりが用意される事が望ましい。調査地そのものに行はれて見ねば判らぬと言つたような形で提起される報告はお互に避けたいと思う。そうちた特殊性を貫徹する法則的なものへの大胆な問題提起(その事は細心なる分析と再構想によってのみ可能でしょう)を期待したい。

山庭周平

村研が研究対象を日本村落研究にとめず、ヨーローペ、アメリカに於ける研究の交流がならないといふ事ではないが、課題が課題だけに、大塚久雄とか高橋幸八郎氏あたりの参加を得るようになつたら、意義深くなりはしますか。

原中村正夫

あってもよいと思う故、ぜひ今年でなければあつてもよいと思ひます。ゼビ今年でなければ、ヨーローペ、アメリカに於ける研究の交流がならないといふ事ではないが、課題が課題だけに、大塚久雄とか高橋幸八郎氏あたりの参加を得るようになつたら、意義深くなりはしますか。

原中村正夫

共通課題のもとに統一的な討論を。

宮城県鳴子町での泊り込み開催にほど決定

された趣意につき、所在地居住会員として、非常に責任を感じますので、この試みを成功させる為、出来るだけ要望事項を在仙会員に單めに御連絡ありたし。

松原治郎

ぜひ、合宿大会を進めて下さい。ここで共同体論に關して少し權威ある意見をまとめる事が大切かと存じます。

園田恭一

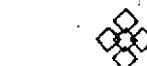
昨年度の大会で決められたテーマを、各分野から追求して頂きたいと思つてます。

小川徹

村落研究の問題点を学びたいと思ってるのですが是非参加したいと準備中です。昨年始めて大会に出席した感じでは、シンポジウムに比して、発表会は討論が少なく、もつと活用の方法がないものかと思つました。

山本登

鳴子温泉のプランはたしかに食欲をそゝるが、いざそのために出掛けるとなると、やはり、尻が重くなる感じもする。箱根か熱海あたりで、お願い出来ればとも考える。共同で村に入るといつても、結局は時間切れになつて了うのではないか。併し、昨年度の東京的なものならば、二日間やるだけの意味はなさうに考えられる。



展や、討論をうがいたいし、会員の質問にもお答えいただきたいと思うのですが。

拡大委員会記事

中田英

共同課題の方の報告は、前年度のように各

テーマ毎に（各専門分野別）—歴史、経済、地理、社会学といった—あるいは地域別

—東北、関西、とか平地、山地別とか—

といったように集中的に行われるよう、

できれば大変い、と思うのですがいかで

しようか。

飯塚博久

仙台の大会は一寸遠いようだと思ふ。できれば東京がよいと思う。それから分科会も少し多くし、少數者の話し合いの場を作ることが大切な様に思われる。

研究報告申込みは一五名あり、しかし、会期が二日で、共同討議に充分に時間をとる必要もあり、一〇名が限度となるため、いくつかを減らさなければならないこととなつた。せっかく応募していただいた方に申訳けないが、次のような基準で残すものをきめることとなつた。

一、共同課題「村落共同体」に関する報告ばかりに限定する。

二、研究事例となつた村々が地域的に各地にわたるようと考える。

なお、第二の点で、中国地方、及び関東地方の事例をとりあげた報告を各一つあて新たに依頼、これを山岡栄市・島崎穂氏に交渉する。もし交渉不成立の場合は、一、二、の基準で次善の方法をとる。
その結果できあがつたプログラムは別掲の如き内容である。

研究報告をお願いすることとなつた諸氏には、九月十日〆切厳守にて、レジュメ（四百字詰二枚程度）を事務局あて送つてもらう。

なお、共同課題についてその問題点を提示する原稿（五枚程度）を中村吉治・喜多野清一両氏に依頼、これも九月十日〆切厳守（送先同様）とし依頼する。

プログラム・レジュメ・問題点提示等は、村研通信社と同時に同封発送（すべて九月十日〆切、九月中旬発送予定、おそらく九月二十日前後には発送）がのぞましい。

大会の司会者団は、次の人々に依頼する。

井森陸平・小山隆・喜多野清一・有賀喜左衛門・福武直・小池基之・星埜博・内山政照・木下彰・中村吉治（順序不同）。会員名簿の改訂版発行は節約、訂正追加のみとする。

前年同様程度は少くとも大会特別会計へ支出の必要があろうと思われるが、竹内利美氏と事務局とで充分御打合せいたして決定のこと。大会参加費は去年の大会と同様に、懇親会費を含めて三百円とする。ティープコードについても同様、充分連絡の上、万善を期す。

最後に、今秋刊行の年報については、動向欄に新設を予定した民俗学の分だけが、〆切にまことにわなかつたので、来年よりに変更したほか、既報予定どおり印刷に廻つたから九月上旬には初校が出るはずとの報告があつた。

事務局を

終るにあたつて

ます。会員各位の御健康と御研究を別にお祈り致します。

（川越淳二）

大会を目前にひかへて、私達の任務もどうやら終りに近づきました。不馴れと筆不精、その上怠惰で、今までの事務局のうちもつともお粗末であったことと自ら承認する次第で、会員の皆様にあらためておわびします。

通信隔月発行はもとより、大会記事号も出せず、どこかの政府のように公約は一つも実行せず、税金（会費）ばかり請求して何とも申わけありません。たゞ通信を出せなかつたのはお送り頂ける原稿があまりにすくなかったことに起因しています。アンケートでさえ半数が戻りません。この点で通信の性格も一考する必要があると思います。

しかし今回は当事者の御尽力で大会報告のレディメモ前もつてお送りできただけは認めめて下さい。大会参加者はもちろん全会員の方の御参考になることを期待します。

これ以上の身勝手な弁明はいすれ大会席上お叱りをうける際にのべさせて頂きますが、事務局をひきうけてはじめて？村研への愛情が泉出したといえるかも知れません。その意味で、この一年間は私にとってまたとない機会でもありました。お礼申上げます。

最後に、お名前はいちいちあげませんが、つねづね御支援下さった先輩、同学の方々に感謝の意を表させて頂きまして、「通信」にかかる事務局退陣の御挨拶に代えたいと思い

第6回大会プログラム

10月7日

開会の辞

井森壁平

報告1. 仮題（江戸時代の東北農村と諏訪農村の比較 墓山村と今井村）島田 隆

報告2. 仮題（明治以降の東北農村）安孫子 勝

報告3. 農業村落共同体の基礎構造 余田 博通

——昼食・休憩——

報告4. 新田地帯における村落共同体

山岡栄市

報告5. 能登離浦の村落共同組織とその変化 中野 卓

報告6. 漁場と村落 竹内利美

——総会・懇親会——

10月8日

報告7. 北海道におけるムラの形成過程からみた
共同体的規制について 布施鉄治

報告8. 都市近郊農村における村落共同体の問題 遠見音彦

報告9. 町村合併における部落組織の諸問題 中村正夫

——昼食・休憩——

報告10. 対馬与良郷大山村の社会構造

原 宏

——休憩・司会者団打合せ——

共同討議

——夕食・休憩——

共同討議